

山と博物館

第46巻 第6号 2001年6月25日

市立大町山岳博物館



夜明けの白馬三山

撮影 近田 信敬

新緑の白馬

— 達人(?) のおすすめスポット —

近田 信敬

田植えも終わり、北アルプスの雪形も次第に形を崩していく。春から夏へ、白馬の風景も衣替えを始める時期である。梅雨時の白馬は、夏山シーズンを前に観光客も少なく、ゆっくりと静寂の時間が流れている。

新緑の綺麗なこの季節、白馬周辺のおすすめスポットをいくつか紹介しておきたい。まず親海湿原。この冊子が出る頃は、やや遅いかもしれないが、5月から6月は花盛りである。白いミツガシワや黄色いサワオグルマから始まり、6月に入ると紫のカキツバタが満開になる。

田と山の風景なら青鬼の棚田が美しい。文化財としても貴重な民家と棚田、その向こうに遠望できる北アルプスの風景は、日本のふるさとを感じさせる。白馬駅近くで山と水田を眺めるなら、わらび平に行く途中の坂、ここからの風景も見逃せない。

また隣の小谷村になるが、雪解けとともに花が咲き新緑が美しくなるのが、小谷温泉先の大滝川や鎌池周辺である。雨飾山登山道には、イワカガミやシラネアオイなどの高山植物も多い。

そして、高山植物といえばやはり八方尾根であろう。7月に入ると様々な高山植物が咲き競う。花とともに、いよいよ夏山シーズンの到来となる。

『白馬の達人になれる本』や『信州、花の達人になれる本』などのシリーズ本を書いているためか、時に「あの達人の……」と呼ばれることもある。しかし実際の私自身は、達人など程遠く、毎日が新しい発見で、そのたびに自分の無知を思い知らされている日々である。でも、これがまた楽しい。知らないことを知ることというのは、ある種の快感をとまなうという話を聞くが、全くその通りだと思う。

「あそここの花の群生は見事だ」「あそこに珍しい花が咲くらしい」などという情報が耳に入ると、たまらずカメラ片手に飛び出してしまう。そんな日々が、たぶんこの先も続くことだろう。

(白馬村在住)

幌尻岳での山川勇一郎さん

高澤 光雄

深田久弥氏が『山と高原』に連載中の「日本百名山」に、幌尻岳とトムラウシ山に取材で登られたのは一九六一年八月であった。その時、北海道新聞学芸欄に幌尻岳の記事依頼があり、その挿絵を描くために山川勇一郎さんも参加された。

登山計画や入山困難な長い新冠川上流までのトラック便乗などは、深田氏の畏友・望月達夫氏が折衝され、案内役は日高山脈の地質調査で精通している北大の橋本誠二先生。ポーター役は翌六二年に北大山岳部が派遣するヒマラヤ・チャムラン峰初登頂を目指す学生隊員を含む三人が、重い天幕や食事一切を担ってくれた。

五日朝、夏期休暇の土曜日とあって駅舎は



「新冠川上流」 画 山川勇一郎
(北海道新聞、1961.8.24)



「七ツ沼池畔のテント」 画 山川勇一郎
(北海道新聞、1961.8.25)

混雑していた。ようやく切符を手にしてホームに駆け込むと、望月さんは列車の入口に立ち、深田さんと山川さん二人で、八人分の座席を確保して頑張って居られた。初対面の山川さんは大柄で体格に似合わぬ柔和なお人であつた。

この頃の日高山脈はまだ登山道も山小屋もなく、幾日もかけて沢を遡行し、滝を高巻くにも敷漕ぎがあり、核心部に入るだけでも一週間がかかった。それが五七年から新冠川にダムと水力発電所建設工事が進められ、奥地まで道路が延びていた。そこを静内駅からトラックで僅か四時間で入り、建設事務所に泊めていただいた。

六日、更に二キロ奥の奥新冠ダム工事現場



「トッタベツ溪の滝」 画 山川勇一郎
(北海道新聞、1961.8.26)

サーブ、サーダーがいて、ジュガール・ヒマール遠征に因んでシエルバも、バサン、ダワ、ラクバと名付けられ、堂々たるヒマラヤごっこである。朝食を済ますと、山はすっかり雲に覆われ、いつ降り出すか分からない。山川さんは大事を取ってここでスケッチをするこ

とになり、一行五人で幌尻岳に向かう。カール壁にはエゾコザクラやアズマギクが咲き、一歩一歩、石を落とさぬよう慎重に伝う。尾根に出ても視界は無く、ただ額平川の流れる轟々と響いているだけ。ハイマツを少し漕ぎ、踏み跡を辿って念願の頂上に達した。

埋めてある登山者名簿の入った缶を取り出し、深田さんと望月さんの名刺を入れる。時折雨になる重苦しい雲の中を、吊り尾根を伝って戸蔭別岳に向かう。途中で雲が僅か切れ七ツ沼が垣間見られた。

その夜は深田さん持参の酒粕で、山川さんのスケッチを肴に団樂が続く。

八日、雨が激しく降っている。最低鞍部から戸蔭別川に下る予定だったが、敷漕ぎで濡れるのを嫌って戸蔭別岳頂上から沢に下ることになった。戸蔭別カールを下っていると、晴れ間から北日高の山容が現れ、ここぞと山川さんは座り込んでスケッチを始める。学生たちは先に下って昼食の準備にかかる。

滝場を数回巻くが新冠川より容易なようである。北戸蔭別岳と滝を配って山川さんの筆は動く。淀んだ湖、苔蒸した岩、天を突く老

霧雨の中をエサオマントッタベツ岳や神威岳への分岐の沢を通過。いよいよ急な滝場の登りとなり、一行の間隔も次第に離れ、山川さんは高巻きで続けた枝から石が落ち、足を傷めて難儀しながら登っている。

学生たちと天幕設営のため先行。潤れ沢を登り切ると眼前が開け七ツ沼が現れる。今宵は高山植物の群落に囲まれた臥床である。

七日、天幕の中は明るみ、嬉々として朝の冷気に浸る。昨夕は霧で見えなかったが、カール壁の上に戸蔭別岳が聳え、辺りはウサギギクやイワギキョウの群落で、随所に沼が散在していた。

深田さんから「君のあだ名はリエゾンオフイサーに決まったよ」と知らされる。バラ



「ドルジェ・ラクパ氷河とビッグ・ホワイト・ピーク＝ジュガル・ヒマール最高峰」
画 山川勇一郎（筆者蔵 色紙）

木と構図が良い。十ノ沢の幕营地まで学生たちはイワナを釣りながら下った。
幕营地では流木をふんだんに燃やして、濡衣を乾かし、イワナの田楽焼きの夕餉は豪勢だった。
九日、雨、よくもこうまで降り続けている。水かさが増し、急な流れに腰まで水に浸かる。時折、山川さんの差し出す杖に縋って渡り切る。ようやく砂利の敷きつめた車道に出て、

本名木材の小屋で一服。山川さんは地下足袋の方が柔らかく、足の痛みは感じないので、登山靴は履かなかった。今日中に軌道のある八千代まで下れそうもないので、ピリカベタ飯場に泊めてもらう。そこで入手した焼酎で最後の夜の長い語らいが続く。
十日、快晴、ダンブカーに便乗させてもらい、北日高の山々を眺めながら八千代駅に到着。時間の合間を惜しんで山川さんは橋の上

から山の絵を描いている。
帯広でこれからトムラウシ山に向かう深山さんと学生たちと別れ、札幌に向かう列車に乗り込

んだ。
山川さんは東京から運転してきたダットサンで襟裳岬まで行き、暫く滞在して絵を描かれた。離道の前に私が案内して札幌西郊外の牧場で二人で手稲山を描いた。その時に「ドルジェ・ラクパ氷河とビッグ・ホワイト・ピーク＝ジュガル・ヒマール最高峰」の色紙を頂戴した。また六三年に戴いた賀状には「かわい



「七ッ沼カールで山川さんと描いたイワブクロ」
筆者画

い白銀荘のエハガキ嬉しく拝見しました。あれ以来すっかりごぶさたしてしまいました。元気でスキーをしていらつしやる事でしょ



山川勇一郎画・筆（筆者宛 賀状）

残された三人の〈字〉

—「西糸屋」を愛された岳人の
絶筆・墨跡ものがたり— ③

奥原教永

田淵行男先生の揮毫とサイン

田淵先生の残された〈字〉は、上高地営業中は玄関に掲げられている上高地西糸屋山荘の看板である「西糸屋」の三文字である。

わが家で言う「先生」とは、山岳写真家の大家として、あるいは高山蝶の権威者として、戦後の人たちの言う「先生」ではなく、昭和六、七年頃から女学生を連れて登山に來た「学校の先生」である。

先生の業績は今さらだから略させていただきますとして、多分、私だけしか聞けなかったと思う無名時代の先生ご家族の苦労がうかがえる、ほほ笑ましい内輪話を一つ記しておきたい。

昭和三十年代の初め、当時、西穂高村（現・穂高町）牧の農家の二階建てを借りていた先生をお訪ねしたことがある。すでにご子息の穂高さんをはじめ子供さんは誰もいなくて、ご夫婦だけで二階にお暮らしであった。写真の作業には暗室らしき部屋がないので、お茶をいただきながら、「現像、引き伸ばしはどうしてるだい？」と聞くと、奥さんが笑いながら「月のない闇夜の夜、子供たちに動かないように注意して、とくに伸ばしするときには私がじつと猫を抱いていた」と話された。先生はニコニコされていて、何も言われな

った。

お宅を辞去し、大糸線の柏矢町の駅まで歩きながら、わずかな妥協も許さない完全さを求める先生のお人柄を思うとともに、奥さんのその話から、当時の田淵家のご家計のようすや、奥さんの内助のご苦労を察したのだった。

父の存命中から、季節外の上高地での撮影、蝶の観察などに先生が来山されたときは、繁子と二人でお世話をした気安さで、昭和四十七年（一九七二）、わが家の創業五十年記念に、厚かましくも看板の揮毫をお願いした。先生はさつそく快諾され、貧弱な玄関を立派に引き立ててくださった。

あれからもう三十年近くなろうとしている。看板といえば、焼失前の「西穂山荘」の看板は、木先生の字であった。燃えてしまったのが悔やまれる。また「黒部五郎小舎」の看板は、わが家でもっとも敬愛するT先生（田淵先生とは別人）のものである。わが家にあるこのほかの田淵先生の〈字〉にちなんだ宝物は、先生が上梓されて贈られた写真集の見返しに墨痕鮮やかに書かれた次のメッセージとサインである。

昭和三十三年六月発刊『尾根路』



田淵行男先生 遺墨
西糸屋玄関前に建つ田淵先生揮毫による看板

「私の高山蝶の生態研究の仕事が以外に手間どり、とうとうその完成を先代英男氏に見て頂くことができなかったのは私の痛恨の極みでした。」

とあって、三十二年九月に他界した父への餞とされた。

私は田淵先生に対して、いささかなりとも「ご恩返しになれば」と思い、日本山岳会発行の『山岳』一九八〇年版に、前年出版された先生の大作『日本アルプスの蝶』の書評を拙文ながら掲載させていただいた。

先生は日本で初めて高山蝶の一種、クモマベニヒカゲが発見された明治三十八年（一九〇五）の六月四日に生まれた。奇しくも六月四日は「虫の日」で、いかにも「高山蝶の田淵先生」にふさわしい。平成元年五月三十日に逝去されたが、この年は私の母が他界し、また私が同日の五月三十日生まれであったので、何かの因縁を感じ、先生の命日を忘れることはない。

（完）
（上高地 西糸屋 山荘）

感謝と思い出をこめて
故奥原英男氏霊に捧ぐ
田淵行男
同三十四年十一月発刊『高山蝶』
限りなき追憶と共に
奥原英男氏の御霊に捧げ
御一家の長年のご好意を謝す
田淵行男
以降、計二十冊を頂戴しているが、ほかは私宛で署名されている。

昭和二十六年（一九五二）、無名の先生を一躍有名にした朝日新聞社刊の『山岳写真傑作集』も頂戴したが、大勢の人が回し読みをしているうちに紛失し、四十年頃気がついて、東京、名古屋の古本屋へ依頼すると、さいわいにも名古屋で、セロハン紙に包まれた保存状態の良いのが入手できた。もちろん署名はない。
わが家の創業五十年記念誌に寄せられた先生のお言葉に

山と博物館第46巻第6号
発行 千代田市立大野山町大字大町八〇五六一
市立大町山岳博物館
TEL 〇二六二二二二二
FAX 〇二六二二二二二
印刷 大糸タイムス印刷部
定価 年額一、五〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号 〇〇四〇一七二二九三